

富田先生の思い出

夏休みの雑司が谷通い

高久清吉

昭和二十九年七、八月の夏休みいっぱい、私は一日おきに雑司が谷の先生のお宅に通った。午後一時から三時間ぐらいい、先生は私一人を相手に、エッグスドルファーの『青少年陶冶』第三編、第五章「郷土原理」のところを読んで下さった。——このような貴重きわまる機会に恵まれたのは次のようないきさつによってである。

この年、私は八年半勤めた小学校教師を退職し、東教大教育学科三年次に編入学した。その私にとってどうしようもない程に苦しかったのはドイツ語の原書講読であった。これまでドイツ語を学んだことのない私は、三十歳近くになって初めてドイツ語をイロハから学び始めたわけであるが、私が選んだ講読の時間は石山脩平先生のシユプランガー『文化と教育』、それに富田先生のエッグスドルファー『青少年陶冶』の二つである。もちろん、全くのちんぷんかん、手も足も出ない状態であった。輪読の順番に入ることでもできず、今、読んでいる所さえも

わからず、いつも部屋のかた隅で小さくなっていた。そのかた隅で、人並みの学習ができないなさけなき、みじめさ、屈辱の思いに涙することもしばしばであった。

とうとう苦しまぎれに、夏休みに入る直前、いきなり富田先生に「休み中、ドイツ語を教えてくださいませんか」とお願いした。それまでほとんど言葉をかわしたこともなかったのに、「この先生なら、こんなわがままも聞いて下さるのでは」という気がしたからである。先生は「いいよ。ぼくの家へいらっしゃい」と即座に承知して下さった。こうして、この夏、私の雑司が谷通いが始まったのである。その後の先生との長い深いかわり合いもこうして始まったのである。

先生は、私のたどたどしい読み、間違いだらけの訳にじっと耳を傾け、丹念に丁寧に一つの誤りを直して下さったのである。夏休みいっぱいこの密度の濃い特別なご指導は、私にとって、一年間、いや二年間、三年間にも匹敵する程の内容豊かなものであった。このおかげで、夏休み後の講読の時間には輪読の順番にも入り、少しはさまになるような読みもできるようになった。

このような相手をして下さった先生のありがたさが本当にわかってきたのは、何年か後、自分で大学に勤める

ようになってからであった。大学の教師にとって、まったく研究の時間が確保できる休みの期間、とりわけ、夏休みがどんなに貴重なものであるか、大学へ勤めて初めてわかると同時に、この貴重な時間の多くを私一人のためにさいて下さった先生のありがたさが、これまた初めて身にしみるようになったのである。

私はこのご恩を教え子に返したいと念じ、赴任した茨城大学で、同じように、夏休み一日おきに、学生と一緒にドイツ語を読んだのである。その学生、菊池龍三郎君（茨城大学教授）は、私の筑波大学退官記念誌に寄せてくれた思い出の記の中で次のように書いている。

「……ドイツ教育学のことについては無知に等しい私には、まことに手に余る書物（筆者注 H・ノール『ドイツにおける教育運動とその理論』）でした。ところが先生は『夏休み一諸に読もうか』と仰言って下さって、塗りたてのペンキの匂いも強烈な新しい研究室棟……で、夏休みの間、私を相手に、余りの暑さにステテコひとつになって、一日おきに付き合ってくださいました。」

この菊池君は次の年に東教大大学院に入学し、こんどは直接に富田先生のお教えをいただくことになった。こ

こで三代にわたる師弟のつながりが生まれたわけである。改めて、人生の縁といったものをしみじみと思っている。

雑司ヶ谷Ⅱ青春の聖なる道

笹本 正樹

あわただしく豊饒で、しかも雑然とした時代がある。それは私の池袋日出町時代であった。池袋より大塚への都電の道をへだてて、二百メートルぐらいのところ、恩師、富田竹三郎先生ご夫妻の家があった。

私は東京教育大学へ、弟は芸術大学日本画科へ通った。近くに女優、叶順子の家があった。私と弟は三畳の部屋に住んでいた。二人のことを心配して、富田先生はよくやってきて下さった。ガラス窓をトントンとたたいて合図をされた。顔をだすと、イチジクの大樹の下に、坊主頭の先生がにこにこして立っていた。

弟は前田青邨先生に学び、平山郁夫さんが助手であった。私は家庭教師で、千葉市川の中村勝五郎家に通っていた。ここは東山魁夷氏が世に出る前に、お世話になったという豪商であった。（中山競馬場主）そんなそんなで、富田先生は絵画の話を、弟から聞いて満足されてい

るようだった。

私がH・リードを卒論で書いていたので、週一回、夜に「Education through Art」を先生の家で、読んでいただいたりした。

教育学にあきたらず、私は「文学四季」という尾崎士郎の会に赴いたり、東京俳優学校の夜間にいたり、自分で文芸誌「ベルセウス」をだしたいと思い、国文の三浦仁君、仏文の面川治治君とベルセウスの会をもったりした。大塚の大衆食堂にいくと、花輪光君がいて、彼の下宿で文学論をたたかわせたりした。

大塚短歌会で木俣修先生にあって、短歌をやるようになり、のち白秋系女流歌人、清水乙女の門下に入るようになった。

富田先生にはお子さんがなかったから、弟といっしょに、食事をいただいたり、いろいろとお世話になった。いきかえりの雑司ヶ谷墓地の道は、私にとって聖なる道であった。左手に、島村抱月の墓があり、やがて右手に竹久夢二の墓がみえ、そして立派な夏目漱石の大墓を左に折れると、もう先生の家は二十メートルぐらいのむこうにあるのだった。

弟は芸大をでて、中学校の教師となり、さらに小学校

の教師となったが、富田先生が国学院栃木短大に務められると、そちらの美術科教育の席にひびいていただいだ。今は院展の会友となっている。

大学院をでると私は香川大学に赴任したので、教育方法談話会への出席も欠きがちであった。しかし、処女作「北原白秋論」は愛読して下さったようである。去年、七冊目の「斎藤喜博の教育美学」は読んでいただけたかどうか。

この四月だった「少年夢二帖」はもはや目を通してはいただけなかった。奥さまが涙ながらに、そう語って下さった。国際的にも第一級の瀬戸大橋が架かったのに、先生をお迎えてできないのは、悲嘆の極みである。

富田先生からの手紙

長谷川 栄

昭和三十三年夏のことであった。私は中学校に勤務して四年目に入っていた。生徒たちを連れて二泊三日で秩父の山登りに出かけ、無事に帰ってきたところだった。身体的にも精神的にも大変疲れたので、家でゆっくり休もうと思っていた。机の上に、富田先生からの手紙があ

った。暑中見舞の返事であった。その中に、「勉強するのは二十代のうちがよい」ということが書いてあった。

中学校の教師として、私は社会科や国語科などを担当し、学級担任もして大分慣れてきていた。力あふれる生徒を相手に学習のことも生活のことに關して指導することは、苦勞が多かったが、次第に喜びや楽しみを味わうことができるようになってきていた。学校の雰囲気も明るくてまとまりがあり、大変居心地がよかった。これから教師として一生を送ることも悪くないだろうと思っていた。これをゆり動かしたのが、先生の手紙の文面であった。それは、若い今のうちに大いに勉強しなさいという内的な呼びかけであった。

その後、私は一週間にわたって自分の進路をあれこれ考えた。このまゝ教師として教育実践の道をたどりその中で勉強していくか、それとも教師をやめて大学院に入って教育研究者の道をとるか、ということであった。家庭のこと、経済的なことなど、考えることは多かった。やっと、大学院へ入って勉強し自分を試してみようと決意した。人生は予め決まっているわけではない。自分の力で切り開いていくものだ。自分に能力があるかどうかは実際に試してみてわかることだ、そんな思いであった。

その年の九月から生活が変った。学校の職務としての教育の仕事の責任を果たすことその他に、大学院に入学するための勉強をしなければならなかった。大学の三年の時に富田先生の学習指導演習の時に使ったエッガースドルファーの「青少年陶冶」の本を持ち出して、それを辞書で日本語に訳すことを進めた。それは、学校では全くできない。当時県の教育委員会の研究指定を受けて、「社会科教育における道徳教育」という主題の下に学校が共同研究を進めていることもあった。学校から七時頃帰宅して、家で高々二時間自分の勉強をすればよい方であった。幸いにして翌年に大学院教育学研究科に進むことができた。

富田先生が指導教官であった。中学校でいつも苦勞していたのは教育評価の問題であったので、これに本格的に取り組んでいきたいと思っていた。しかし、先生はもっと教授学の基本的な問題に取り組むことを勧めてくれた。この勧めを受けて、私はオットー・ヴィルマンの教授学の研究をすることになった。この研究を媒介にして、いつも先生の指導を受けることになったのである。その後には大学院生から助手になり、大学に勤めるようになったが、いつも先生の研究の暖かなはげましを受けて

きた。

私が今は大学の教官として勤められるのは、一重に先生の指導の賜物である。それは、先生の私へ書いてくれた一通の手紙から始まっている。

富田先生と私

佐々木 俊 介

大学に入って間もない頃、富田先生の「教育参加」の一時間目には、おおよそ次のような意味の文を教わった。

「子どもたちはみな快活であった／教師も快活であった／わけても校長は最も快活であった」私はひどく得意でさっそくこれを田舎に書き送った。これが、私が東京から田舎に書き送った最初の手紙である。

ゼミではデュイイの How We Think を教わった。全文訳出させられた。「本の読み方にはいろいろあるが、よい本を一年かけて一冊読めばよい」と言われた。私は当時はよい本をたくさん読みたいと思っていたのでこの考えには反対であったが、もし二十歳のときからこのことを実行していれば、よい本を三十二冊読んでいたことになる。この How We Think が私のデュイイ研究の出

発点になった。

私がいかにたびたび先生に叱られたかについては、いまさら書くまでもないだろう。しかし、今でも鮮やかに思い出されることを一つだけ書いておこう。いつもの研究会でメンバーの発表のあと私が何も質問しないのが悪いといって帰してもらえなかったことがある。私もけっこう強情だったから、二人して研究室のテーブルをはさんで暗い部屋でにらみ合っていた。先生はなかなか「帰ろう」とは言われない。そのうちに先生の方から「とにかく外へ出よう」と言い出されて、やっと解放されたと思った。茗荷谷の駅の方へ怒られながら歩いた。あといくら怒られても数分の辛抱の筈であった。ところが駅までくると「家まで歩こう」と言い出されて、またまた怒られながら都電通りを歩く羽目になった。途中で何回か小突かれた。この日は先生のお家の前でやっと帰していただけた。

就職してからは、先生に怒られることはずっと少なくなった。しかしお会いするたびに指摘されたのは、教育現場の経験の無いことである。（英語の非常勤講師ならば二千時間ほどやったのだが）とくに小学校の経験の無いのが致命的だと言われた。そこで小学校行きを決行す

ることになるが、これが六年前のことである。富田先生のご指導がなかったら、この決心はなかったであろう。

学生時代、勉強のために先生のお宅におじゃまさせていただいたことも忘れられない。先生にお返しというのはできないことなので、私は自分の学生にその何分の一かでも同じ形でお返ししていきたいと考えている。

大学院に入って以後は、富田先生はいつも私の心の中で私をにらんでおられた。先生の居られない世界での生活というものは、私には考えられないものである。しかし現に先生が亡くなられたいま、これから自分の中でどういう変化が起ころうとしているのかは、まだ自分にも分っていない。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。

我が師富田先生を語る

小川 博 久

富田竹三郎先生が逝かれた。この事実は日が経つにつれ、実感が深くなってくる気がする。先日、主人不在の先生宅に伺い、奥様と在りし日の思い出をお話することができた。雑司ヶ谷の周囲の風景も、先生のお宅の佇

まいも、先生の書齋に残された書物、ノート、先生の文字、すべて少しも変わっていないように思われた。それだけに先生の御不在がそれだけ実感に迫るものがあった。思えば、先生の御指導を受け、御好誼を賜って長い年月が過ぎた。この間、私にとって先生の存在は、ある種の緊張を伴わないではいられない存在であった。時にはこの緊張から逃げだしたい、解放されたいと思うことも一度や二度ではなかった。

しかし同時に、ふり返ってみれば、先生は博士課程への入学、北海道教育大へのはじめての就職、東京学芸大への転任等、私の研究者としての人生の節目で、私と喜びを共有して下さった学問の師であり、人生の師でもあった。これまでの私の半生を語るとき、青年時代、壮年時代を通じて現在まで、富田竹三郎先生が存在を無視することはできない。

先生の学問一途な生き方とそれへの情熱は、常に私の研究者としての生き方を反省するときの鏡であったし、今でもそうである。先生の邪心のない、子どものような笑みは、私達弟子を勇気づける力であり、先生の真実を究極まで見通そうとするまなざしは、私の生き方にひそむ韜晦さを日々に晒す厳しさの教えであり、自分が関心

をもつ事柄への専心は、時間を越えて、時流に迎合せず
に生きるべき研究者のお手本であった。

私も人生の半ばを生き、研究の世界の様々な人間像と
交わるにつれて、先生が終生変わることなく持ち続けら
れた真摯で、純粹な生き方が、いかに貴重なものである
かを思い知らされている。

先生なき今、私は、先生の不肖の弟子の一人にすぎな
いが、先生の研究者としての生き方と、われわれ弟子を
思い、終生、慈愛に満ちた指導をして下さった師として
の生き方に学び、その一片でもわが身として継承してい
きたい。わが師、富田竹三郎先生の御冥福をお祈りする。

富田先生、郷里の大先輩

庄 司 他人男

富田先生に初めてお目にかかったのは、今からおよそ
ど三十年前の昭和三十三年六月、山形大学教育学部の東
京支部同窓会の席でした。これは私が大学を卒業して東
京都足立区の小学校に勤務した年でしたので、鮮明に記
憶しております。先生は私にとりましては郷里の大先輩
でもありましたので、その後の私の歩みは先生のご指導

・ご助言と切り離しては語りえないものになりました。

そのころから、できれば大学院に進学したいという希
望は持つてはおりましたが、当時はどちらかといえば生
活指導に興味を持っておりました。とは言っても、その
面に関する特別の勉強をしていたわけでもありませんで
した。その後、後輩の気安さをテコに先生のお宅にお邪
魔して直接お話を伺いしたり、先生のご著書『学習指
導——新教育の改善のために』（光風出版、昭和三十一年）
を読ませていただいたりしているうちに、いつの間
にか先生の門下生になったような錯覚に陥ることさえあ
りました。もちろん大学院は学習指導で受験しました。

大学院での先生のゼミでは、ヘルバルトの『Allgemeine
Pädagogik, 1806』（一般的教育学）の講義をやって
いただきました。正直に言って解らないところばかりで
したが、その後十数年たってもう一度読まざるをえなくな
ったとき、ゼミでの書き込みが大いに役だつことになり
ました。修士論文では、アメリカのエッセンシャルイズム
を代表するモリソン（Morrison, H. C.）の授業論をとり
あげましたが、その背景には、先生の『学習指導』のサ
ブタイトル「新教育の改善のために」がありました。つ
まり、戦後「新教育」の長所は認めながらも、その短所

をどう克服するかを検討する時期にきている、という問題意識でした。何とかまとめて提出はしましたが、数日後に先生にお会いしたときは、ほんとうに、「穴があれば入りたい」とはこのことかと思いました。

博士課程に進むにも順調にはいかず、先生には大変ご心配をおかけしました。なんとか滑り込みしましたが、最初の一年間は自分の今後の研究テーマをどうするかで悩みました。モリソンの理論を遡ればヘルバルト派との関わりが出てくるのではないか、という感じはありましたが、それを中心に研究できるという見通しは全くもっていませんでした。

そうこうして一年も終わろうとしていた新年の賀状で先生から、これからはアメリカ・ヘルバルト派を研究してはどうか、というご助言をいただきました。それからおよそ二十二年間は、専らそれだけが私のテーマになり、先生の絶えざるご指導とご助言により、どうにか一段落つけることができました。この間にあらためて確信したことは、ヘルバルトの「教育的教授」の概念は、教育の永遠の真理である、ということでした。

とするならば、その概念は表象心理学に代わる近年の認知諸科学の成果をふまえて、もう一度とらえ直すに値

するのではないか、ということになります。二年ほど前から、このような課題意識にたって模索し始めました。

今回の拙論は、そのような過程における一つの試みです。先生の庄内弁でのお叱りが聞こえてきそうですが、今はご寛恕いただくほかありません。

ご冥福を心からお祈りいたします。

アメリカ留学と富田先生

川 合 治 男

一九六六年七月のある日、富田先生から電話があり、すぐ家に来なさいとのこと。早速雑司が谷に向くと、「旅費や学費はどうなっているのか」と切り出された。「すべてアメリカで出してもらえるので大丈夫です。」「そうか、それはよかった。ところで、約束のお金をあげよう。」「そう言われても、もう十分間に合っていますから。」「いや、約束は約束だから。」「いいえ、学費も保険も先方からいただけるのだから困ります。」「これは君達若い人に使ってもらってこそ値打ちが出るのだから取っておきなさい。」というようなやり取りが続いたが、奥さんの「私達が使ったところで無駄になるし、これか

ら先どんな出費に迫られるかもわからないから、遠慮しないでお待ちなさい。」という切札に負け、ありがたく頂戴することにした。そして、例によって長居をさせられ、深夜に帰宅した。ところが、翌朝早く先生からの電話で起こされた。「君にあげると約束した以上、このお金はもう君のものだ。いつまでも他人のものを持っていくと落ち着かないから、すぐ取りに来なさい。」ということだった。お陰で心おきなく渡航準備ができました。

これには訳がありました。当時の学習指導研究室の大学院生達は、それぞれドイツやアメリカの人物や教授法を研究テーマにしていました。その二年前に先生が定年退職されるまで続けられた木曜ゼミ、そしてその後もずっと続けられた教育方法談話会の合宿研究会などで、先生は「これからは若い人はどんどん海外へ出て行かなければ駄目だ。そういう勇気が必要だ。こういうテーマはその国へ出かけて行けば、また違った取り組み方ができるというものだ。お金が無くて行けないのなら、旅費くらい私が面倒見よう。」と何度も口にされていた。一方、私はプログラム学習についての修士論文を書いた後も、そのテーマを持ち続けていたのだが、日本ではブームが急激に去り、アメリカからの資料も思うように入手でき

ずに苦勞していた。これでは本場へ乗り込むしかないというわけで、アメリカのめばしい大学に手紙を出し、奨学金について問い合わせたのだが、どこからも思わしい返事はなかった。残る道はフルブライト留学生試験しかないということ、とりあえず応募してみたところ、どこで間違えたか、パスしたというわけです。四月初めに留学先が正式に決まったことを報告したら、先生もたいへん喜んでくれました。その際に、経済的には何も心配いらないことを強調しておいた筈なのに、冒頭のあの会話になったというわけです。

留学三年目に車の免許を取り、フォルクスワーゲンを手に入れたので、先生に「こちらにアパートを借りて、一、二カ月住み、その間に学校訪問や旅行などしませんか。」と誘ってみたのですが、現在ほど海外旅行というものもが簡単ではなかったし、病気になる時のことが心配だからということ、とうとう実現しませんでした。先生は僻地教育に関心を持たれ、私達と東北などの学校を巡ることを夏の年中行事にしていました。そこで、中西部の片田舎の村落で、かつては単級学校であったことが一見してわかる建物をスライドにして送ったり、家族のようにしてくれたブラウン家のおばあさんが二十年代

に、単級学校の先生だったので、馬に乗って学校に通ったというような話を手紙に書いて送ったりしたけれど、実際に会えば当時の様子をもっと聞き出せたらうから、今となってはもう一押しすべきだったと悔やまれてなりません。

私の底の浅さを見透していた先生

菊池 龍三郎

私は先生の退官間際の弟子なので、研究室での御指導は短期間で、むしろその後定期的に行われる談話会やお宅へお邪魔しての御指導と二十数年お世話になった。

最初の頃、無学にも拘らず緊張感の乏しかった私は、研究会の折先生の前で居眠りをして並居る先輩連を驚かせた。また自分の無学を自覚しない者の哀しさから皮相な発言などよくしたものだ。でも「お前は得をした」と先輩連に言われる程、叱られることが少なかった。あれは最後の頃の弟子ともなると「これを何とか物にしてやろう」などという教育的情熱が先生の方に薄れてきたためであろうと思っている。

でもそのうち全てに自信のない私は先生が私の、又私

の学問の底の浅さを見透しているなと気づくようになった。一つは私が何か物を言うとき疑わしそうな顔をなさることがあること、もう一つは折に触れて先生の教育学者としての素地の厚さや関心のまっとうさを私なりに理解できるようになったためでもある。

先日、先生が遺された蔵書の整理を手伝った時その思いは決定的になった。例えばカントの三批判の原書がみつかったのだが、先生はそれをお若い時全部読了されているのだ。そういう例にいくつも出会った。私などが何か分ったような口をきくのを先生はいつも熱心に聴いて下さったが、でも内心では随分とおかしさをこらえていらしたのではないかと汗が出る思いがする。

先生はいわゆる遊びというものはなさらなかった、否そう思われてきた。実際先生に俗の印象は希薄であって、聖と俗の緊張関係が醸し出す面白みは少なかったと言えるかもしれない。しかしそれは先生が私達に教師以外のお姿を見せることが出来なかったためだとも思うし、先生御自身が皆が勝手につくる先生像に抵抗なさらなかったためでもあると思う。しかし実際には、先生には例えば美術への関心や鑑賞眼などふだん皆には余り知られていない「遊び」の側面もかなりあったのだ。大分前から

お宅に何う度にそういう面に触れるのが私の大きな楽しみになっていった。

今度蔵書の中から矢代幸雄の「東洋美術論考」を頂戴した。奥様に伺ったところでは、亡くなられる少し前にもこの本の内容はちゃんと覚えておられたそうで、それ程特に東洋美術のことはお好きだったのだ。関心だけは人並み以上の私にとってこの本を頂戴できたことがうれしくてならない。一生大事にしたい。

富田先生の思い出

小林 洋一郎

大学院入試の面接の時、最初に質問されたおだやかで気品のある先生が、今にして思えば富田竹三郎先生でした。おかげさまで入学できた喜びも束の間、富田先生は一年後には停年退職されました。大学院でご指導いただきましたのは、教育方法学関係の科目の他、教育方法談話会であり、木曜日の午後開かれていました。

「教育方法学」の講義では、書物のようなテキストは使用されなくて、毎回あらかじめわたされた先生の原稿を清書し、コピーしておくのが私及び一緒に入学した菊

池氏の役目でした。こんな経験は大学時代にはなかったことです。大変光栄に思い、喜んで引き受け、質問の香りに胸をときめかせたものでした。ただし、菊池氏の洗練された美しい清書に比べ、私のは小学生のような字なので大変はざかしい思いをいたしました。その菊池氏は（通学距離も長く、車中ではむずかしい書物など読んでいたため）授業中によく居眠りをしていましたが、先生は一度も怒られませんでした。

富田先生が退官されました後も、教育方法談話会を通して、また個人的にご指導いただきました。例えば、私が就職して最初に書いた夏目漱石に関する論文を送りましたところ、先生は大変興味をもって読んで下さったようで、継続して研究したらどうかとはげまして下さいました。またあるとき、教育テレビ番組のコラムをもらいながら、鳥大農学部林真二先生の二十世紀梨の研究のお話が大変感動され、放送の時の原稿か何かほしいのだが、何とかならないだろうかとという依頼を受けたことがございました。さっそくその時の放送の録音テープをダビングさせていただき送付しましたところ、先生の「視聴覚方法論」を送っていただきました。私はこの書物に刺激されまして、「視聴覚的方法と放送教材」を

テーマとして、「教育方法学研究」第七集に小論を書きました。先生はお身体の調子があまりよくないと聞いておりましたのに、私の論文を読んで下さっており、あるときの手紙に、「私の書いたものを多く引用して下さい。ありがとうございます」という意味のことが書いてありました。

富田先生は、まことにまじめなお人柄であり、学問一すじに生きてこられた方だと思います。私が少しでも学問するセンスを身につけることができましたのは、先生の学者としての立派な姿勢を通して、「学問の精神」を感じることでできたからであると思います。

晩年の先生は、一貫して教師教育における教育実習の重要性を強く主張されておりました。そのお姿が、私の頭にこびりついて離れません。最後になりましたが、今までのご指導に感謝し、ご冥福を心よりお祈り致します。

富田先生の思い出

渡 辺 光 雄

富田先生にはじめてお会いしたのは、私が東京教育大学の教育学部生のときでした。教育方法学の授業で先生がヘルバルトの話をされたことがありますが、そのと

きの授業風景がどういいうわけか今でも鮮明に記憶に残っています。ヘルバルトの「専心・致思」のことははじめて知ったのもこのときでした。

以来十年余の歳月を経た筑波大学でペスタロッチ祭が開かれ、講演者として来られた先生のお話を聴講させていただいたとき、私には茗溪の重みのある伝統を感じて止みませんでした。茗溪の伝統の重みは、先生が講演されたときばかりではなく、むしろ、それ以前から感じられました。先生は、筑波大学でペスタロッチ祭が開かれるようになってから毎年のようにOBとして出席されましたが、出席されるたびにいつも会場の最前列で聴講されている真摯な後姿を拝見するとき、私は伝統の重みを強く感じるを得ませんでした。先生は、筑波大学で教育学を学ぶ多くの学生の目に茗溪の伝統を強く印象つけて下さいました。

筑波大学に私が赴任したのは昭和五十年でしたが、その当時の私の仕事は教育工学上の実務的なものでした。実務に追われる歳月をしばらく過した後に、富田先生の主宰される教育方法談話会に出させていただくようになりましたが、これによって、私は、それまで実務に追われて中断していた自分の修士論文以来の研究テーマに改

めて取り組むことができるようになりました。談話会に漂う厳しくも暖い茗溪の伝統が私に自分の本来の研究の道を変更して見つめ直させてくれました。それまで十年余の間御無沙汰していた日本教育方法学会へもそのお陰により参加して研究発表を行うことができるようになりました。

富田先生の主宰される談話会で発表するテーマに対して私はいつも誇りをもって取り組んできました。そこでは、富田先生に自分のテーマを聞いていただくだけでも茗溪のとくに教育方法学の伝統に触れられるという歓びがありました。私が修士論文で取り組みながらも中断していたクラフキの「二面的開示」の概念の追究に關しまして、その概念がアルントにまで遡ることを「発見」できましたのも談話会に出させていただいたことの成果でした。このあと、アルントと同時代のジャン・パウルにも同じ遡及ができるものと思ひ、作業を進めました。あるとき、富田先生が御自身所蔵のジャン・パウルの本を私に示され、「二面的開示」の概念の遡及をその本で行うように言われました折は、大変な名譽を感じました。そのお陰によりまして、私は、「二面的開示」の概念の歴史的遡及がアルントとジャン・パウルに至ることを「発

見」することができました。

大学で教育方法学の授業を私が行うとき、ヘルバルトと共に同時代のアルントとジャン・パウルを取り上げながら、二十有余年前のあの授業をいつも脳裏に描くのです。

富田先生の思い出

大 高 泉

教育方法談話会（現教育方法研究会）の一員に加えていただいてから、早くも七年になろうとしている。大洗の「かもめ荘」での談話会が最初である。このとき初めて、富田先生にお会いした。その研究会で、先生は御自身でも発表なさり、また教え子の発表を熱心に聴いておられた。文字どおり、耳に手を当てて聴いておられた。今でもとても印象に残っている。これが、談話会でのいつもの先生の御姿であり、研究と教育に情熱を注いでこられた先生の御姿である。と同時に談話会のいつもの雰囲気でもある。それから西山荘に行った。そのときの写真が三枚残っている。光栄なことにそのいずれにも私は、富田先生と並んで写っている。無論私は、富田先生の直

接の教え子ではないが、その教えの流れに接することができたのは幸運であったと思う。その先生にもうお会いすることができないことは、とても残念でならない。先生の御冥福をお祈りするばかりである。

永遠なる教育学と富田先生

大河原 清

教育という行為は愛という行為として捉えることも出来る。その愛という行為は、人類愛の行為として捉えることが出来る。過去も、現在も、そして未来永劫にわたる愛の行為、それが教育の行為である。このため、教育は人種・信条・性別を越えて、いかなる束縛からも自由でなければならぬ。

教育学は教育という行為についての学問である。学問であるから、それは信仰ではない。・・・と、富田先生が『永遠なる教育学』という言葉を発表された時に、教育学について思った（或いは、そのようなことをお話になられたのだろうか、記憶に定かではない）。昭和五十九年の十二月のことであった。富田先生は、どのような事から『永遠なる教育学』ということを発表さ

れたのか、私は知りたい。この言葉は大変よい響きを持っている。

ところで、富田先生に私がはじめてお会いしたのは、筑波大学公開の時、長谷川先生と一緒に土浦駅までお迎えに行った時であった。七十歳の頃であった。その後、私が就職して高知大学の高さんと一緒に教育談話会のメンバーに加えて頂いた時から、お会いする機会は談話会の年に一〜二回と少なかった。しかし、富田先生がバックの紐を頭に掛けていた姿は強烈な思い出になった。既に耳が遠くなっておられたためか、耳の所に手を当てられ、筑波大学のベスタロッツチ祭でも、談話会でも熱心にお話を聴いていた姿を思い出す。これほどまでに研究にかりたてるものがどこにあるのだろうかとお会いするたびに感じた。

つい先日、富田先生の刊行になった教育方法学研究の第一集を、私の勤めている岩手大学教育学部の石川桂司先生に頂いた。前々から、第一集だけが欠落していたので欲しかったものである。改めて、富田先生がなされてきたお仕事を、多くの先生方が知っていたことに感動した。短い期間でしたが、お世話になりました。ありがとうございます。

・富田竹三郎先生の想い出

吉田 武 男

実際のところ、私は富田先生の講義を聴いたこともなければ、特に先生から指導を受けたこともありません。したがって、私は先生のほんとうのお人柄をわかっていないかもしれません。しかし、ここに、先生の想い出を記す機会を与えていただきましたので、先生との出会いのなかで私の印象に残っていることをここに述べたいと思います。

初めて先生の名前を耳にしたのは、筑波大学の修士課程での高久先生の講義の時でした。確か、昭和五十四年の秋頃だったと思います。高久先生が何かの話の関連で、先生の恩師のことについて語られ、その折に、富田先生のお名前を知りました。

それから一年半ほど経てからだと思いますが、ある時、大塚の学校教育部で開催される西洋教育史研究会で、私は発表することになりました。二十名ぐらいの人がおられたと思います。その中で、とびぬけてお年を召しておられ、発表や意見を前屈みになって耳に手をあてながら熱心に聴いておられた方がいました。その方が富田先生であることがわかったのは、司会者がその方を指名した

時でした。その研究会での先生のお姿を拝見して、ほんとうに「研究熱心な先生」だなと思ったのが、私の先生に対する第一印象でした。その後も、富田先生のお姿は、東京学芸大学で開かれる世界教育史研究会、国立教育研究所で開かれるドイツ教育研究会でも見かけました。それらの研究会でも先生は、私が初めてお目に掛かった西洋教育史研究会の時と少しもかわらず熱心に発表者のことばに耳を傾けておられました。何度か、それらの研究会の帰りに話をしながら池袋まで帰ったこともありましたが、いつもその時の話題は、教育ないしは教育学のことでした。それ以外の話題は、まったく言うほどありませんでした。そういうたわいで富田先生の第一印象は、そのままずっと変わることがありませんでした。

また、ある時、このようなこともありました。確か、昭和五十六、七年だったと思います。東京都内で開かれた何かの学会の折に、山の手線のある駅まで帰りを一緒にしたことがあります。そして、その駅でお別れる時に、突然、先生はくず餅を二箱買われ、私に差し出されました。私は二箱もいただいてはと思い、先生に「一つだけ下さい」と断わったのですが、「筑波には友だちもいるのだからみんなで食べなさい」とおっしゃられ、二

箱ともいただいて帰ったことがありました。その折に、

「心の暖かい先生」だなと思ったことを今でもはっきりと覚えています。

そんなことがあってから、何度か私も富田先生のお宅にお邪魔することがありました。一昨年の三月にも、車で奈良から筑波へ向かう途中、先生のお宅に立ち寄りました。すると、「君が来たら、渡そうと思っっている本がある」と言われ、一冊の本を書斎から持ってこられました。そのうえに、本を開かれ「この箇所は君のためになるし、まだ日本では十分に紹介されていないので、いつか是非読んでみなさい」とおっしゃられ、私に下さいました。その本は、(F. X. Eggersdorfer, Jugendziehung, München, 1962)でした。その折にも、私はこんなに気を使っていたいただき、なんて「心の暖かい先生」なのかと思いました。今、思い返してみると、この時が、生前の富田先生のお姿を拝見する最後となりました。

こういったようなことがありまして、私の富田先生に対する印象は、「研究熱心な先生」、そして「心の暖かい先生」であり、富田先生への想い出は、数々の研究会でのお姿や、おみやげのくず餅、先生からいただいた本とともに私の心の中にずっと残ることと 생각합니다。

富田竹三郎先生の御冥福を心よりお祈りいたします。